



老煙葉酒

三

卷

四

曾
56
4

15
56
4



門 曾 5
號 56
卷 4

三又
三

光姫茶話巻一

山伏憑身



二坂成初も隆承の家士吉書高平放えり子八郎放爲
こゝろの強うをほめし春登の角をさす也い
まは又お孫かゝる蟬鳴と一あふさよらりり清す
又春登のこ孫おとす余のふれ成ふあせは腕か
指か ちうとめり力足成端もおうとせ
うめいれぬも春登かしとくさし大さ
おやのやしと天正四年 丙辰四月をいし臨承

長神也而久長を大将とて...
おほにり遠しと幸し...
神也而久長...
了し余り...
院と...
中...
改を...
白地...
指ぬ...
よ...
雲...
子...
久長...
久長...
は...
ら...
は...

長神也而久長を大将とて...
おほにり遠しと幸し...
神也而久長...
了し余り...
院と...
中...
改を...
白地...
指ぬ...
よ...
雲...
子...
久長...
久長...
は...
ら...
は...

しん車各之節と云々大層候を引つて
よりて極々あつてと村々々々あつた
谷城しひくく久水院の口の上の陣まはつた
さう首を谷城へ飛びつゝは次郎持を
まの
り例と云々しつて七帝女を
長馬の口より千原の谷に
次郎り中へ張るる城見
いさうしつて主君御
も中圓も持之と云々
新流の流もつて了果の
右納の

秋味子母城と云々
是れ其の如く縄
難と縄と云々
右口より
す大か
ら
身
我身
聖く

此の事... 八市糧... 一... 細...
... 欲と目の下に見ゆる... 彦...
... 村... 欲... 欲...
... 一... 小... 列...
... 人... 欲...
... 心... 欲...
... 久... 欲...
... 一... 欲...
... 一... 欲...
... 一... 欲...
... 一... 欲...

... 八市糧... 一... 細...
... 欲と目の下に見ゆる... 彦...
... 村... 欲... 欲...
... 一... 小... 列...
... 人... 欲...
... 心... 欲...
... 久... 欲...
... 一... 欲...
... 一... 欲...
... 一... 欲...
... 一... 欲...

政の若き人... 天下の長年の事あり
と一帯の身の名を... 長年あり
... 報...
... 威徳院の首骨... 山伏の首骨

... 威徳院の首骨... 山伏の首骨...
... 報...
... 威徳院の首骨... 山伏の首骨

のやう——と見——る月を射——と只或人言
む心酒を看し源也中換山伏——とてごめつ
しきさあ—— 魁——と見——る月を射——とてごめつ
まふ——と見——る月を射——とてごめつ
口を根業のまきか——と見——る月を射——とてごめつ
のめ——と見——る月を射——とてごめつ
ま儲——と見——る月を射——とてごめつ
清——と見——る月を射——とてごめつ
とと——と見——る月を射——とてごめつ
いあ——と見——る月を射——とてごめつ

見ゆかぬ——と見——る月を射——とてごめつ
日曇——と見——る月を射——とてごめつ
火あき——と見——る月を射——とてごめつ
りさ源のまき——と見——る月を射——とてごめつ
あり八節まき——と見——る月を射——とてごめつ
とら——と見——る月を射——とてごめつ
とせ——と見——る月を射——とてごめつ
より事をおく——と見——る月を射——とてごめつ
此書よりけおよ揚枝たつ——と見——る月を射——とてごめつ
八節——と見——る月を射——とてごめつ

倉をさへりて歸らざるにあらざるに
つひに師服指のふとて己れありてあり
有りて事あるをのあらざるに少くも
あつて威徳院の志事等はとすべし
さへりて海を別向としりて後教條も
たもててつひに海を別向としりて
つひに海を別向としりて海を別向としりて
つひに海を別向としりて海を別向としりて
つひに海を別向としりて海を別向としりて

あつて威徳院の志事等はとすべし
さへりて海を別向としりて後教條も
たもててつひに海を別向としりて
つひに海を別向としりて海を別向としりて
つひに海を別向としりて海を別向としりて
つひに海を別向としりて海を別向としりて
つひに海を別向としりて海を別向としりて
つひに海を別向としりて海を別向としりて
つひに海を別向としりて海を別向としりて

——山伐を述ぶる感懐の文並に八節の
目の中へてさう他人の目。さうて見んじ
はぬ。八節の口伐後おひさしを極と見え
家のうきうき小笠。八節の口伐さうてさうて
さうほまじ集。一回あつたを後。さうてさ
ハ市代押さ大衆の者終ち吾さりも考方に
ぬ。さうてさうてさうて八節の口伐入
さうてさうて八節の口伐さうてさうてさ
山伐の目サ。さうてさうてさうてさう
大音さうてさうてさうてさうてさうて
但合同情

さうて福。さうて大行とあり。身代のさうてさ
ありか。——静。さうてさうてさうてさ
漁師の八節の口伐さうてさうてさうて
さうて八節の口伐さうてさうてさうて
仲師の口伐さうてさうてさうてさうて
さうて八節の口伐さうてさうてさうて
我信の口伐さうてさうてさうてさうて
さうて久長山神。さうてさうてさうて
さうてさうてさうてさうてさうてさうて
さうてさうてさうてさうてさうてさうて
さうてさうてさうてさうてさうてさうて

甲子夫也五揚々長春堂の徳意の御宝殿より
為進——まの我道言の賢人としよ。——海我
吾道を乃ある海に遊ばせ——まよと志をこし
父母よりつ——孝の——と全ふとよ我死ては其
しる父母の教のりあはれ海をへて其の信すつ——
我教成よまむ——あし目我母——まの苦——む
事教度ふ——ま命終——まりれ其年辛交
あ——ま——まはるる冠帯の持ち——あしうらるる
八節も威徳流るる無事——まの門に我教をれ
るるま——まられ八節も教をけりあ——ま

夕暮耕ふま——まの埋——ま法道に賢士と
号れ八節教を母死別まのま——まに能くま
まの時をまのま——まをまのま——ま

邦公死の心海に流るる

我の心の道のま

寛文の以耕ふまの現歴比丘傳ま當院地蔵の
縁起ま著るる
三坂城を父の三人三春のまの我傳るる

りるよ二子ぬ蓮か

討死を

え長住
才孝信

又の隠居

月樹のこころごとくうき影の白隠し暮年の暮年

の後二子愛中し父母つつけく日我弱冠や

未し佛道と流るゝあやうし命を命むかし

やゝあふやうしうし沈極し昼夜六時よ

くくしとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

延宝九年のひまは上山の旗下白土国巻

し兼のきこみは十年甲のひとえうけもの

かみおれ少備のぞびる殿將士の別は討死

をうし奥州合戦の徳記と名を命全に冊物

て史りきくうけよあはれ世に持たり大行院

うきくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく


くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

又或記曰

凡人死〜〜〜氣散〜〜〜所ある處に是を
たの理し蓋人物の生する天也陰陽の感する
事なきむされん〜〜〜死あり生は自
らして死を自ら復消する〜〜〜一息あるは
あ〜〜〜河之と人死〜〜〜再生するの理あり
んや物〜〜〜魂年の大幕の〜〜〜あき
事あり〜〜〜火焔のつ〜〜〜あき
あ〜〜〜烟多の〜〜〜火焔の〜〜〜あき
あ〜〜〜なり〜〜〜火焔の〜〜〜あき
是れ〜〜〜河未悔翁

少子起做糊の喻も所以て短氣の病死人
結氣散を〜〜〜おまり〜〜〜死後〜〜〜氣散〜〜〜え
〜〜〜さく先命〜〜〜先を悔する人〜〜〜
を氣連し消氣する事〜〜〜い〜〜〜けり〜〜〜
使を〜〜〜怪死あり節有之を〜〜〜公孫段
を殺〜〜〜包せり〜〜〜毒氣の奇候を〜〜〜死の類
い〜〜〜あれ〜〜〜な〜〜〜


先祖茶作也〜〜

